

「農民車」をめぐる生産と消費のネットワーク

隅 杏奈



「農民車」とは？



淡路島には他地域ではあまり見慣れない農作業用の車がある。一見トラックにも見えるが運転席に囲いがなく、エンジンも剥き出しのものもある。これらは「農民車」と呼ばれ、農繁期になると農作業で活躍するという。様々な顔を持つ農民車は、どこで生まれどのように使われているのだろうか。

「農民車」が使われる環境とは？



8月初旬の西淡町。稲が青々と茂る水田が広がっていた。



畑の傍らには玉ねぎ小屋がある。収穫が終わった玉ねぎが出荷を待つ。



農協の精米所に農民車で来ていた。近所の方がちょっとそこまで、という感じだ。



あわじ島農協淡支所の集出荷場。農民車に玉ねぎを積み、出荷に来る人もいるという。

淡路島では農業は主要産業のひとつである。特に、淡路島南部に位置する南あわじ市は水稲、白菜（レタス）、玉ねぎといった三毛作が確立され、集約的農業が営まれている地域だ。8月初旬は玉ねぎの収穫が済んだ畑に稲が青々と広がっていた。農閑期のため、畑で活躍する農民車はあまり見られなかったが、農民車が生まれて使われる場所を求めて各所を訪れた。

農民車はどこで製造されるのか？



メーカー製の農機具を扱っている店舗。
馴染みのあるカラーの農機が並ぶ。

事務所奥の作業場。農機の販売以外にも修理も請け負っている。農民車の修理も依頼されることがあるそうだ。



トラクター。
エアコンやラジオ付きなど高いものは500万円以上するそう。

T 工業所では農機具メーカーの農機を販売・修理している。事務所のある店舗では小型の耕耘機や草刈機、修理中のトラクターが置かれていた。別の場所に倉庫があり、トラクターなどの大型農機が保管されている。農民車について尋ねると、「農民車は専門の鉄工所がつくっている。」とのこと。大手メーカーとは別に、地元で製造販売される拠点があるようだ。

農民車はどうやって製造されるのか？



屋外に積み上げられた部品

農民車を専門に製造販売する鉄工所を尋ねた。親方の代から50年以上続けている。以前はこうした鉄工所が何十軒とあったそうだが、現在では島内に数軒のみ残っているそうだ。

鉄工所敷地内で種類ごとに積まれた中古の部品は他所から仕入れる。それらを組み合わせて製造することで様々な風貌の農民車ができています。



鉄工所倉庫の二階部分



屋外に積み上げられたタイヤ





農民車の土台となる部分



エンジン部分の配線作業中



農業用発動機を載せたもの



普通自動車のエンジンを搭載

島内だけでなく、徳島など島外からの注文もある。注文を受ける際は契約書を交わすことはせず、「こんなんして」と口頭で伝えられるそう。大量生産のメーカー品と違い、一台一台仕様が違い価格も違う。確かに、今回見かけた農民車はどれひとつ同じものはなかった。農発（農業用発動機）を載せていた以前の農民車は、一週間ほどで完成していたそうだが、現在では普通自動車のエンジンを使っており、完成までも時間がかかるという。農民車が製造され始めたのは昭和 30 年頃という話を聞いたが、農民車の仕組みは時を経て複雑化しているようだ。

ナンバープレート付き農民車



専業農家の方が使っている農民車。20年程前に購入。



いつ頃のナンバープレートだろうか？

農民車の仕様は様々だが、車体をよく見るとナンバープレートが付いているものとそうでないものがある。南あわじ市西淡庁舎で尋ねると、昭和30年頃に「タカシマ式」と呼ばれる型にだけナンバーを発行したそうだ。しかし、現在ついているものは車体の付け替えにより、そのまま残されているものである。

なぜ農民車が使われるのか？



玉ねぎを一束にしたものが木の棒に吊るされている。



玉ねぎ小屋に停められた軽トラ



玉ねぎ小屋に停められた農民車



収穫した玉ねぎをコンテナにそのまま保管することもある。

玉ねぎの収穫時期が過ぎ、実際に農作業中に使用されている農民車を見ることはあまりなかった。しかし、農家の方の話からは農民車がいかに便利なものであるかがわかる。例えば、荷台が上下するものは玉ねぎ小屋で玉ねぎを干すときに役立つ。他には、農薬を散布するためのタンクを積んだものやダンプ式のものもあるようだ。

また、軽トラでは入れない「じゅるい（ぬかるんだ）」場所にも入ることができる。一度購入すると修理をしながら、20年使えるという声もあった。注文通りの仕様にしてもらえることや、耐久性といった様々なメリットがある。

どういった場面で農民車は使われるのか？



牛舎の内部



牛糞と藁がコンベアを通して、農民車の荷台へ



バラケを運ぶための農民車

牛7頭から始めたという酪農家Hさんの牛舎を尋ねた。二代目が跡を継ぎ、Hさん夫婦とおばあちゃん、数人のヘルパーで酪農を営んでいる。初代は酪農の傍ら、馬や牛で瓦を運ぶ「馬力」の仕事をしており、その頃に農民車も使われていたそうだ。

現在、ここで使われている農民車のひとつが、牛糞と藁を混ぜたバラケと呼ばれる堆肥専用のものだ。10年前に購入し、バラケを運ぶためステンレスの箱を鉄工所へ注文したそうだ。別の場所で乾燥させたバラケは農家から依頼があると畑に撒きに行く。



牛の飼料になるコーン。牛舎横の畑で栽培される。

別の農民車。コーンの刈入れに使う。畑の轍をものともせず、車体を揺らしながら進んでいた。



コーンハーベスター。
コーンを刈り取って吹き出し口から噴射する。

牛の飼料にするコーンの刈入れ作業には別の農民車が使われた。こちらの農民車には細部にこだわりが見られた。コーンを積む背の高い荷台にするため、鉄枠をつけてもらうように鉄工所に注文したそう。また、ベニア板は自ら張りつけるなど、自由度の高い農民車ならではの話だ。

Hさんのところでは農民車以外にも様々な作業用機械が使われていた。Hさんの奥さんは一軒の農家や酪農家で、何台もの機械を所有する苦勞を口にしていた。そうした中、「こんないいもんはない。」と農民車の



コーンハーベスターが刈取ったコーンが、農民車の荷台にうまく入るように息を合わせて運転する。



荷台の後方部が開閉し、ベルトコンベアでコーンを押し出す仕組みになっている。

荷台にコーンが満載になると、コンクリートサイロに移し、乾燥させる。

バラケ用の農民車もそうだが、この農民車にも助手席が付いていなかった。その点に関して、子どもが小さいときに乗りたがると危険だから取えて注文しなかったという。運転席は剥き出しで、保護するものは何もない。しかし、性能的には車と同等のため危険なことはしないように気をつけているそうだ。「スピードを出さない」「遠くまで行かない」といった言葉は他の使用者からも聞かれた。

利用している人々にとって、農民車は注文通りに作ってもらえる便利なものであることに違いない。しかし、それらを長く地域の中で使っていくには、乗り方に対する配慮が必要という認識を持っているようだった。

おわりに



今回の調査では農民車を製造する人々やそれを利用する人々を尋ねた。そこで明らかになってきたことは、南あわじ市西淡町地域における農民車をめぐる人々のつながりだ。調査をするうちに、なぜ淡路島で独自に発展してきたのか、といった新たな疑問も生まれた。しかし、昭和 30 年頃に出始めた農民車がなぜ今に至るまで農家にとって重要な存在であるか、その理由の一端を垣間見ることができたのではないだろうか。